



オンライン音読

青森県立青森高等学校 2年 齋藤 まゆか

皆さんは、小学校の頃に、教科書を読むいわゆる「音読」という宿題があっただろうか。私の学校では、大人の人に聞いてもらい、カードにサインをもらうのがルールだった。しかしこれが意外にも面倒なもので、高学年になる頃にはサインだけ書いて持って行くようになっていた。

私には今年五年生になった弟がいる。もちろん弟にも音読が毎日課される。しかし弟は私と違って、毎日楽しく音読をしているようだ。「オンライン音読」だ。一体誰とやっているのかというと、県外に住む祖母だ。ずっと家に居る祖母は適任者だった。弟は、学校から帰ってすぐに音読をするように、少し帰りが遅い私はその様子を見たことがなかった。ある日私の学校が早く終わり、家に帰ると、玄関の外まで聞こえるほど大きな笑い声が聞こえてきた。家に入ると、弟はまさにオンライン音読中だった。タブレットに向かって座る弟とタブレットから聞こえる祖母の声。と言つてもすでに音読は終わっているようだった。まるで同級生のように会話をしている祖母と弟は微笑ましかった。二人はメッセージアプリのビデオ通話機能を使っていたので、通話終了後もスタンプを送り合つて遊んでいた。今や祖母もJK並にスマホを使いこなしている。この前までガラケーを使っていた人とは思えない。何十年前には、こんな簡単に顔を見ながら電話できるようになるなんて想像もできなかっただろう。私たちの世界は、誰もが夢見たドラエモンの世界に近づいている。何十年という時間が場所と場所をつなぎ、違う世代の人間をつないでいる。このコロナ禍で完全にとまってしまったかと思われた世界も、時間が確実に前へ進めている。久しぶりに祖母に手紙を書くと思う。